

GEKKAN ORIMOTO

## 月刊 織本

## 10月号

2008年10月1日 Vol.170

発行 医療法人社団 織本病院

印 刷 〒204-0002 東京都清瀬市旭が丘1-261

Tel 042-491-2121 URL <http://www.irimoto.or.jp/>

発行人 高木由利



(2008.9.14)

## 師匠からの手紙



理事長 高木 由利

9月末から急に涼しくなり、朝晩は寒さを感じるほどになりました。

食事の仕度をしていると、滝のように流れていた汗もかかなくなり、キッチンの窓からはさわやかな風が流れてきます。そして、その風に乗って石焼きいも屋の声が聞こえたのには驚きました。

\* \* \*

毎年10月の下旬に日本大腸肛門病学会が開催されます。私は1992年大阪で行われた第47回の学会に初めて演題を発表しました。演題名は、“血液透析患者の内痔核手術の術式検討”でした。その時から16年間、私は日本大腸肛門病学会に演題を発表し続けてきました。秘書の話では、初めての発表の時、私は真赤なスーツを着て会場に臨んだということでした。当時、女医の発表は私ただ1人でした。何故私は赤いスーツを着たのかよく覚えていませんが、ダークスーツの男性の先生方の中に飛び込んで決戦の火蓋を切るような思いだったのかも知れません。それは私の演題がこの学会では大変珍しく、透析者の痔核手術はタブーと言われていた時代だったからです。

今年も透析者に対する新しい術式についての発表を

するのですが、その準備をしながら、16年前の初めての発表のファイルを読み返してみました。そして私はそのファイルの中に私が心から尊敬する今は亡き師匠“小澤貞一郎先生”の自筆の手紙を見たのです。先生はペリカンの太字の万年筆を愛用され、ブルーのインクを使っていらっしゃいました。達筆で文学者のような文章を書かれるのでした。文章だけでなく、肛門管の解剖図もありました。ある手紙は“次々と浮かぶことを下記に…”を始まりに、頭に浮かぶ様々な理論を展開され、手紙にしたためて下さったのです。16年前の私はきっと先生の目には幼く頼りない者に映っていたことがよく分かります。又、ある手紙の最後に“小澤 床にて”というものがありました。先生は肝硬変と肝臓癌を患っていましたが、月に4日間だけ、療養中の熱海のご自宅から当院まで診療と私の指導にいらして下さっていたのです。

私はこの宝物のようなお手紙を読みながら、自分が小澤先生にいかに大切にされ、愛されていたかを再認識しました。そして私の行う1つ1つの手術は、小澤先生の熱い想いが込められていると感じました。先生

に対する感謝の気持ちは、私が出会う全ての肛門疾患の患者様に悩みからの解放感を味わって頂くことでお返しできるのかも知れません。

本当の師匠とは、亡くなられても弟子の心の中に生

き続けて下さる方だと私はつくづく思います。

今年の発表も又、力いっぱいしていこうと決心しました。

## 足が喜ぶ靴を履きましょう!!

透析センター 看護師 紫垣 文



こんにちは。私は透析センターで勤務している看護師の紫垣です。

私は足のケアを学ぶ民間の資格である、“フスフレーゲ（ドイツ式フットケア）”の勉強をしています。今回はその中で、『足と靴について』お話ししたいと思います。

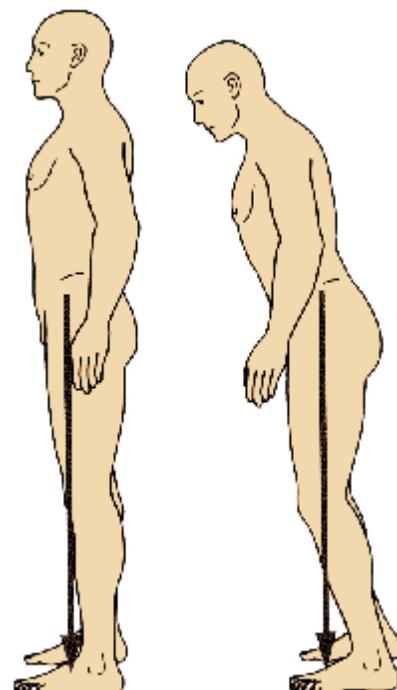
\* \* \*

突然ですが、あなたがお持ちの靴の中にどんなに長く履いても疲れない靴は何足ありますか？1～2足あれば、あなたはとても幸せな方だと思います。靴選びは簡単そうで意外と難しく、長時間履ける靴にはなかなか巡りあえないものです。

靴選びで1番大切なことは、“自分の足の特徴・変化をよく理解しておく”ということです。足は一生涯同じ形ではありません。サイズはもちろん、ワイズ（靴の横幅）、アーチの高さなど、気付かないうちに少しずつ変化していきます。足の形が変わる理由の1つに“加齢”があります。歳をとるに従って、腰が曲がり姿勢が前傾気味になると、足の重心は足部の中央を越えて足の前の部分に変わってきます。これによって、足の形は“開張足”と呼ばれる変形が起こります。もちろん程度に個人差はありますが、若い時に履いていた靴が合わなくなります。

足の変形は様々です。その中でも、扁平足（縦アーチの低下）、開張足（横アーチの低下）は私が患者様の足を拝見する中で出会う頻度は少なくありませんが、一般に自分で足の裏を見てもなかなか気付くことはありません。しかし、「最近、足が疲れやすくなっ

た」「以前履いていた靴が合わなくなった」「靴を履いて歩くと下半身が痛い」ということが出でてくれれば、足の変化が起こっているサインかもしれません。足の症状には必ず足の変化があります。“足はいつまでも同じ”と思わず、靴を服と同じと考え、体型の変化と同じように対応しましょう。多少の足の変化であれば、靴の調整だけで以前と同じような履き心地、歩行環境を得られるようになります。しかし、そのまま放置しておくとそれが重症化し、筋力の低下、骨格の変形を引き起こすこともあります。早めに足の変化に気付き、



対応するように心がけて頂きたいと思います。

最近は、個々の足の大きさや形を調べて、その人に合った商品を勧めてくれるお店も多くなってきました。お店によっては中敷きの調整も、履き古したお気に入りの靴で行うことも可能となっています。

若い時には当たり前にできた“元気に歩く”ということが、中高年になると体重増加、運動不足からなかなか難しくなります。自分の足の変化をよく理解し、足環境を整え、何歳になっても元気に歩きましょう！

THE  
病理診断  
Vol.41

## 水くみ男の話

聖マリアンナ医科大学 診断病理学教室教授

高木正之 先生



インドの水くみの男は、2つの壺を持っていました。1つは完璧な壺で、もう1つはひびが入った壺でした。男は、天秤棒の端にそれぞれの壺を下げて、小川から主人の家に毎日水を運んでいました。完璧な壺は、1滴の水もこぼしません。ところが、ひびのある壺は、主人の家に着くまでに少しづつ漏れて半分になってしまいます。ひび割れた壺は、いつも欠陥のある自分のことを恥じていました。ある日、ひび割れた壺は、小川のほとりで水をくんでいる男に話しかけました。「私は自分が恥ずかしいし、あなたにすまないと思っていました。あなたがいくら頑張って水を運んでも、私のひびから漏れて、あなたの努力が無駄になってしまう」男は、やさしい笑顔で言いました。「水を運ぶとき、道端に咲いているたくさんの花に気がついていたかい？君が毎日水を与えてくれるから、あの花たちは美しく咲くことができたんだよ」

この話を聞いて、私は、「私の目には、あなたは高価で尊い。私はあなたを愛している。」と、聖書の中で神様が私たちに言っている意味が少しあわかりました。人の目には欠点に見えていても、知らないところで人を助けていることがあるのです。私たちは、病気や事故にあって、自分の思い通りのことができなくなると、自分を価値のない者と思い、人に迷惑をかけていると思って恥じてしまいます。しかし、人間の本当の価値は、健康で、人よりも何かができるということではなく、その人がどのような状態であっても、たとえ不治の病で何もできなくても、今、神様によって生かされていることがあります。

私の目には悲観的にしか見えないことでも、神様の目にはどのように見えているのだろうかと、心のレンズを切り替えて見たいと思います。

# フットマッサージ はじめました。

足浴とマッサージで疲れた心と体に  
癒しをご提供いたします。

外来・入院患者様はもちろん、付き添いの方やお見舞いにいらした  
ご家族の方等も是非ご利用ください。



内 容：足浴 10分  
マッサージ 10分  
実施日：月～土曜日  
AM10:00～12:00  
料 金：1,000円  
(1F受付にてチケット購入)  
場 所：リハビリ室

※チケットは平日（月～土）の9:00～17:30に1F受付にてお買い求めください。

## 第91回 腎疾患ゼミナール

### 腎不全と共に生きよう!! ⑨

腎臓内科：高木由利

リハビリテーションセンターからのワンポイントアドバイス

理学療法士：布山 哲生



2008年10月30日（木）  
午後1:00～2:00  
オリモトホール（当院4F）  
参加費無料